

## 小学校で習う漢字で学ぶ 日本の歴史

動画リンク: <https://youtu.be/ydg3bR8t0ow>

### 日本の文化と日常

日本の小学校(6年間)で習う漢字は、全部で1,026文字です。  
この動画では、日本の小学校で習う漢字のみを使用しています。

ただし一部の人名や地名・名称については中学校で習う漢字が使用されていることがあります。

この動画は、前半は少しゆっくりのスピードで、漢字にはふりがながあります。  
後半は少しだけ速く(+20%)なり、漢字にふりがなはありません。学習にお役立てください。

日本の歴史を紹介します。日本の誕生から江戸時代までをみていきます。

江戸時代までにしたのは、そこまでが実に日本らしいからです。

今の日本は欧米文化のえいきょうをたくさん受けています。

これは明治時代(1868年～1912年)に起きた文明開化がもとになっていると考えられています。

欧米とはアメリカとヨーロッパのことです。

「文明開化」とは、欧米の文明を急速にとり入れて近代化していった動きのことです。

日本は文明開化以降、アメリカ、イギリス、ドイツなどの文化、社会制度、習かんをとり入れて日本風にアレンジして成長してきました。

そのため、明治時代の1つ前の時代である江戸時代(1603年～1868年)までが、実に「日本らしさ」を感じると、海外の人に人気です。

#### ■日本人はどこからきたのか

日本の学校の歴史の教科書は、旧石器時代(38,000年～16,000年前)から勉強が始まります。

しかし、この動画では2023年にわかった最新の情報をもとに、そのもう少し前から勉強していきましょう。

人類はアフリカで生まれたので、日本の歴史は日本と呼ばれる島に人類がやってきたことから始まります。

最初の日本人は誰なのでしょう。

2023年に、最初の日本人に近いとされる人間はタイの密林にいたことがわかりました。

パッターン県という場所で暮らす少数民族のマニ族です。

マニ族は今も吹き矢で野生の鳥をつかまえたりして生活していますが服は現代のものを着ています。

DNAを調べてみると、日本人に近いことがわかりました。

現代日本人のDNAは中国人、ベトナム人、モンゴル人とはなれていて「日本人は誰なのか」は、それまでわかっていませんでした。

アフリカで誕生した人類のうち東南アジアのタイなどに向かった人類が北上して日本に向かったと考えられます。

#### ■旧石器時代(38,000年前～16,000年前)

日本の歴史を学ぶときに旧石器時代から始めるのは、日本における一番古い文化を確認できたからです。

日本最初の文化の証こは、打製石器です。石を割ってとがった部分をナイフのように使う道具です。打製石器のことを旧石器と呼びます。

野尻湖底遺跡(長野県)では4万年前にいたナウマンゾウ(学名: Palaeoloxodon naumanni)の化石と一緒に打製石器がみつかりました。

これでゾウを解体したのです。すごいですね。

#### ■縄文時代(16,000年前~2,300年前)

日本人は打製石器から、石と石をこすってみがいてつくる「磨製石器(新石器)」を使うようになりました。

この時代を縄文時代といいます。

考古学ではこの時代を新石器時代と呼ぶのですが、日本では縄文時代といいます。縄文式土器という独特の器をつくっていたからです。

縄文式土器は、焼く前に縄を押しつけて模様をつけました。縄文人は土器以外に農工具、皮はぎ具、あみ、料理用の皿もつくっています。

縄文時代の当初は更新世という氷河期が終わり、完新世という現代に近い地球かん境が始まった時期になります。

当時のアジアでは小麦や稲を栽培していましたが、日本は遅れていて縄文人は動物をしゅりょうしたり木の実をとったりしていました。

しゅりょうとは、道具などを使って、鳥やけものをつかまえることです。

縄文人は次第に生活スキルを向上させます。木の実を植えて栽培したり、粘土に植物のせんいを混ぜて土器の強度を高めたりしました。

社会と文化もつくられました。定住して村のようなものができ、人間関係に上下ができ、自然災害が起きないように祈り、装しよく品をつくりました。

経済も形成されていきました。塩をつくる人や海で漁をする人が現れ、物と物が交換されるようになりまし

た。地面を掘り、木で基そをつくるたて穴住居に住みました。

ハマグリ、アサリ、マダイ、クロダイ、スズキ、シカ、イノシシを食べたあとが残っています。縄文人はかなり美食家です。

北海道の縄文人はトドやアザラシをとって食べていました。

イノシシりょうでは、人は、犬を使ってイノシシを落とし穴に追い込んでいました。

このころから犬は人間の大切なパートナーで、犬の墓もみつかっています。

社会、文化、経済ができると生存しやすくなるので人口が増えます。

縄文時代の初期は2万人くらいでしたが、一時は26万人まで増えました。

縄文時代の遺せきは観光地になっています。

青森の三内丸山遺せき、秋田の大湯かん状列石、東京の大森貝塚、新潟県の馬高・三十稲場遺せきなど。

土ぐうは土でつくった人形です。病気やケガが治るように祈るためにつくられたものや、安産祈願としてつくられた土ぐうもあります。

#### ■弥生時代(2,300年前～1,700年前)

縄文時代は13,700年も続きました。  
縄文時代と比べると弥生時代は600年しかありません。

縄文時代と弥生時代を区別するのが人です。

弥生時代には中国や朝鮮半島から人が渡ってきました。この人たちを渡来人といいます。

現代日本人にも、遺伝子レベルで縄文人に近い人と渡来人に近い人がいます。

そのため、弥生人とは、縄文人、中国などからやってきた渡来人、縄文人と渡来人のミックス(混血)の3者で構成されます。

中国や朝鮮半島からやってきた人たちが日本に水田で米をつくる方法を伝えました。

水田稲作は生活、社会、経済、政治を変えました。

水田稲作はイノベーション(innovation)であり、人類を養う力はしゅりょうとは比べものになりません。

人口は縄文時代の26万人から60万人に増えました。

農業はやることが多いので村の人口が増えました。

また米は保存できるので、持てる者と持たない者でお金持ちの人と貧乏な人が生まれ争いが起きようになりました。

争いはやがて他の村との間でも生まれ、このことは村の結束を強めました。

結束するにはルールが必要で、これが法律の始まりです。

強い村が弱い村を支配して小さな国ができました。小国どうしの戦いが激しくなり、軍事力を強化するようになります。

中国大陸から青銅(合金)や鉄でつくった剣を輸入する小国が現れ、日本は内乱状態になりました。これを倭国(わこく)大乱といいます。

日本初の大戦争、倭国大乱を終わらせたのが、邪馬台国の女王、卑弥呼です。

卑弥呼は神の言葉を人々に伝えて政治をしました。

邪馬台国がどこにあったのかは不明ですが、卑弥呼は実在していたとされています。

#### ■古ふん時代(200年代～500年代)

弥生時代の次は古ふん時代です。古ふんとは王の墓のことです。

格差がない縄文時代の埋そうはみな同じでしたが、弥生時代には質素な埋そうと豪華な埋そうが生まれ、古ふんはさらに上級の埋そう法です。

えらい人が死ぬと豪華な古ふん、ふん丘墓(ふんきゅうぼ)をつくりました。

1個の墓が数十メートルもあり、剣やつぼなどの宝物も一緒に埋められました。

ふん丘墓の超豪華版が前方後円ふんです。  
国力を示すため王が死ぬと大きな前方後円ふんをつくるのが流行しました。

最大の前方後円ふんは5世紀ごろにつくられた大仙陵古ふん(大阪府)で全長525m。

ピラミッドなどと並ぶ世界3大ふん墓で、今は世界遺産です。

東京ドームでも100mくらいしかありません。巨大古ふんづくりは大規模公共事業であり、日本の国力が上がった証です。

弥生時代の終わりごろに内乱を収めた卑弥呼が亡くなるとまた内乱が起きました。

そして古ふん時代にヤマト王権が誕生しました。

ヤマト王権は奈良県の奈良盆地にできた、複数のごう族による連合体でした。

ヤマト王権は現代の天皇のルーツに位置づけられています。

このころは天皇が直接政治をしていました。さらにごう族という勢力が誕生。

特に平群氏、物部氏、大伴氏、蘇我氏がとても力を持つごう族でした。

ちなみに宮内庁によると、初代天皇は神武天皇で、紀元前660年に天皇になっており、それは弥生時代のことです。

ただ、伝説であるという意見もあります。

ヤマト王権が古ふん時代に勢力を維持できたのは自分たちは「神と一緒に存在する」と宣伝して、人々がそれを信じたからです。

当時の人々はこの世は神が治めていると信じていました。

ヤマト王権は、神から恩恵を受け取って人々にわけ与えるといったのです。

ヤマト王権は宗教を政治に利用して混乱を収め、さらに社会制度もつくっていきました。その代表が氏姓制度です。

氏姓制度は、人々を身分や地位に応じて分類する仕組みです。氏(うじ)は家系や部族などつながりの強い集団を指します。

姓(かばね)は地位の高い個人に与えられた身分や地位の名称です。

古ふん時代には、王や貴族、役人、武士などに姓が与えられていました。

仏教が日本に伝わったことは古ふん時代の大きな出来事の一つです。

朝鮮半島の国家、百済の使者がおしゃか様の像などを持ち込みました。

#### ■飛鳥時代(593年～710年)

飛鳥時代は都(首都のこと)が飛鳥(今の奈良県明日香村)に置かれた593年に始まります。

この時代の最初の政治トップは推古天皇でした。

現在の奈良県の中央部に位置する明日香村には、高松塚古ふんへき画やキトラ古ふんへき画などの国宝や国指定重要文化財がたくさんあります。

国宝とは日本政府が最も重要と考える財産のことです。

奈良県は飛鳥時代からしばらく政治と行政の中心地だったので貴重な遺せきがたくさん残っています。

日本の歴史を旅するなら、奈良は外せません。

飛鳥時代は、政治と行政の権限と財源が一カ所に集まる仕組みづくりが進みました。

ちなみに、今の日本もこれと同じで、少し難しい言葉でいうと「中央集権国家」といいます。

選挙や法律がないまま政治改革が進んだので、争いが絶えませんでした。急に仏教が入ってきたことで宗教戦争も起きています。

当時の天皇は大統領や首相のような存在で政治と行政のトップです。ごう族が天皇側についたりはなれたりして戦いや暗殺が起きました。

飛鳥時代の有名政治家、聖徳太子は天皇の子供で、10人の話を同時にきくことができる天才です。

十七条憲法とかん位十二階という規則をつくりました。

十七条憲法は、争わず話し合おう、仏教を尊重しよう、天皇に従おうといった内容になっています。現代の憲法とは関係ありません。

かん位十二階は氏姓制度から脱却するため、身分に関係なく優れた人を政治に関わらせる制度です。

ただ、しよ民は対象外で民主的ではありません。



聖徳太子は律令国家を目指しました。武力や悪事で政治を動かすのではなく、法律のようなものである律令で国を動かそうとしたのです。

ただ、律令は一部の人が決めたルールにすぎず、現代の法律のように国民による選挙で選ばれた人が決めたものではありません。

なお、聖徳太子は天皇家の一人で優秀な人材でしたが天皇にはなっていません。

一緒に政治改革をしていた女帝の推古天皇がいたからです。

ごう族では蘇我氏が活やくし暗やくしました。蘇我馬子は聖徳太子をよう立して政治改革を後押ししましたが、別の天皇の暗殺にも関わっています。

聖徳太子や推古天皇がほうぎょすると蘇我氏はやり放題。蘇我蝦夷(えみし)や蘇我入鹿(いるか)は天皇を無視して政治を行いました。

「ほうぎょ」とは天皇などの死亡の名称です。「天皇が死亡した」という言葉は正しくなく「ほうぎょされた」といいます。

蘇我氏に対抗したのが中臣鎌足と中大兄皇子の天皇派で、乙巳(いつし)の変という内戦を起こして政権をうばいました。

その後の政治改革は「大化の改新」と呼ばれるほど大きなものになりました。

土地と人民をすべて天皇の所有にする公地公民というルールをつくりました。

班田収授法はいわば古代のマイナンバー制度で、戸せき管理や土地管理のルールです。

人民に田んぼが貸与され収かくした米を税としてちょう収しました。

「壬申(じんしん)の乱」は当時の最も大きな内戦でした。

絶大な権力を持っていた天智天皇がほうぎょしたことで起きた後つぎ争いです。

この時代の人たちは、ごう族が実権をにぎっても天皇家が政治を取り戻しても、とにかく戦争ばかりしていました。

ただ経済、文化の領域では目覚ましい発展がありました。

大都市、藤原京は今の奈良県橿原市と明日香村につくられました。

現存する世界最古の木造建築物、法隆寺が建てられ、日本最古の本格的通貨、和同開珎(わど  
うかいちん)が発行されました。

聖徳太子は中国を治めていた先進国、隋に小野妹子をリーダーにする遣隋使という派遣団を送ります。政治を学ばせるためです。

遣隋使は定期的に派遣され、その後の中国である唐にも遣唐使を送りました。若者が政府の命令で中国留学をしたわけです。

飛鳥文化は現代に通じる寺院、ちょう刻、仏像、仏具の基そをつくりました。

これらは中国のほかインドやギリシャのえいきょうも受けています。

日本人は昔から世界のものを採り入れて自国流にアレンジするのが得意だったようです。

#### ■奈良時代(710年～794年)

都とは中心や首都という意味合いで、天皇及び皇族の居所がある場所という意味でも使用されます。

せん都とは首都の場所を変えることです。

奈良時代は都が藤原京から平城京(現在の奈良市)にせん都した710年に始まります。

天皇は巨大都市をつくることで力を国内外に示しました。

平城京は唐(昔の中国)の都、長安をモデルにしてつくられ、大きな建築物、平城宮を中心に街を計画的に整備していきました。

奈良時代は飛鳥時代のバージョンアップ版です。

政治、宗教、行政、法律、都市が発展しました。そして飛鳥時代と変わらず、争いは絶えません。

現在、日本政府は政治を宗教から切りはなしていますが、奈良時代は政治と宗教が一体で考えられていました。

政治が宗教を利用し、宗教が勢力を強めました。

天皇が地方政府である国司に寺を建てるように命じました。国司とは、現代の会社でいう地方の支店長のようなものです。

寺は仏教の活動の拠点です。

当時、大きな地しんや伝染病、ききん(食べるものがない)、反乱が次から次へと起こり、国民が不安になっていました。

全国に寺を建てれば、仏様の力で平和が訪れると考えたのです。

奈良市の東大寺の大仏(高さ15m)はこの取り組みで最も注目される建造物で、752年に完成しました。

大仏に目を入れることによって「たましいを入れる」とされ、これを「大仏開眼」といいます。

中国から鑑真(がんじん)というえらいお坊さんが来日して修行道場を開きました。

お坊さんになる資格制度をつくり仏教を制度化していきました。

仏教は政治へのえいきょう力を強めます。道鏡というお坊さんは天皇から法王の地位が与えられ、権力者が2人いる二頭政治の一つを担いました。

二頭政治とは、二つの頭と書くように、ボスが2人いる政治のかたちを意味します。

法律の発展は目覚ましいものがあり、たとえば養老律令は法律である律と令をまとめた法典です。六法全書がつくられたイメージです。

行政も進化しました。三世一身の法は、農家が田んぼや畑を耕したら、その土地は自分を含めて3世代まで自分の土地にできるというルールです。

この時代、土地は天皇のものでした。しかし、三世一身の法で3世代限定とはいえ、農家が農地を持てるようになり、農業に対するモチベーションが高まりました。

「こん田永年私財法」は三世一身の法をもっと強くしたものです。土地を耕したら一生自分のものにできるルールです。

奈良時代の終わりごろは国が荒れます。

長屋王、藤原四兄弟、橘諸兄(たちばなのもろえ)といった人たちが天皇を巻き込んで政治で争いました。

国民は重い税に苦しみ、放火で抗議する人もいました。天皇が「これではダメだ」と考え、平城京を捨てます。

せん都先は長岡京で、今の京都府長岡京市です。政治・行政の中心地が奈良から京都に移りました。

しかし長岡京でも政治による争いは続き、天皇はここを784年から794年までの10年しか使わず、奈良時代は終わりました。

長岡京が捨てられた理由には、暗殺事件でばっせられた早良親王のたたり説、大洪水で街の整備が進まなかった公共工事失敗説があります。

#### ■平安時代(794年～1185年)

平安時代は長岡京から平安京にせん都(首都を移動)した794年から始まります。現在の京都市の中心部にあります。

平安京は東西・南北5kmの正方形のなかに天皇の住まい、行政機関、大きな寺があり、普通の人たちが住むアパートのような長屋もありました。

長屋というのは今でいう集合住宅のようなものです。

平安京の道路は、メインストリートの朱雀大路を中心に東西南北に直角に交わるように整備されました。

これが「ごばん目状」といわれる理由です。

平安京のなかに京都ご所があります。ご所とは、天皇が住んでいる場所という意味です。

京都ご所は1800年代後半に東京が首都になるまで天皇の住まいとして使われました。

天皇は1,000年以上京都にいたわけです。

飛鳥時代も奈良時代も100年くらいしか続きませんでした。平安時代は約400年続きました。そのため国力がますます強化されました。

平安時代は日本史ファンに人気の時代です。

紫式部が世界で一番古い長編小説、源氏物語を書き、地方がとても元気になり、武士が活やくしました。

平安時代は政治の主役が天皇や貴族から武士に変わっていきました。

武力と経済力が支配する世界になり、さらに混乱します。

こん田永年私財法により未開拓地を開拓すれば自分の土地にすることができ、そこで農業を行うことで財産を持てるようになりました。

当時は工業もサービス業もなかったので米や野菜をつくる農業をする人がお金持ちになり、権力者になることができたのです。

「農業をする人」とは、実際に農作業をする小作人(農家)ではなく、小作人と土地を保有する貴族やごう族などのことです。

そして財産を持った者はさらに開拓できるので、さらに財産を増やすことができます。

財産を生む大きな私有地のことをしょう園といいます。

しょう園経営でたくさんの富を得た貴族である藤原氏は国の政治を担当するまでになり、天皇や上皇と争うようになりました。

上皇とは、後継者に地位をゆずった天皇を指す言葉です。天皇の位をゆずった人のことを「上皇」と呼びます。

貴族や天皇が争いのなかで頼りにしたのが、武力を持つ武士でした。武士のなかで台頭したのが源氏と平氏です。

源氏も平氏も最初は天皇などの護衛部隊でしたが政治の力を求めるようになりました。

そして保元の乱と平治の乱という大きな戦争が2つも起きたのです。

2つの内戦は天皇家の内紛に源氏と平氏が加わって代理戦争になりました。勝った平氏の平清盛は太政大臣という政府の役職を得ました。

源氏は生き残っていました。源頼朝は力をたくわえ、油断していた平氏にリベンジします。

平氏はえらそうにしていることが多かったので味方が少なかったのです。

源氏と平氏の因ねんの対決である源平合戦は、ドラマや映画、マンガ、ゲームになるほど日本人が興味を抱く戦争です。

日本の内戦の興味深い点は武士が力を持っても天皇家をたおさなかったことです。

武士は実権をにぎったあとも天皇を尊重し利用しました。

文化では源氏物語のほか竹取物語、伊勢物語、古今和歌集、枕草子などが生まれ、ひらがなとカタカナもこの時代につくられました。

宗教では最澄というお坊さんが、じょう土宗、じょう土真宗、日れん宗などの基そとなった比叡山延りやく寺(滋賀県)をつくりました。

比叡山延りやく寺は、世界遺産になっています。

空海というお坊さんは、高野山(和歌山県)に金剛ぶ寺を建てて真言宗を広めました。

空海は唐(今の中国)から土木や学校を日本に輸入したことで知られています。

ここから先は、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、安土桃山時代、江戸時代をみていきます。

源頼朝や織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、千利休といった日本史のスーパースターが次々登場してさまざまなドラマを展開しています。

ドラマチックな歴史とともに注目したいのは、近代日本の基そが築かれていく過程です。

どの国にも似ていないおもしろい国「日本」がどのようにつくられてきたのかみていきましょう。

#### ■鎌倉時代(1185年～1333年)

鎌倉時代の歴史上の意義は、政治の主役が朝ていから武家変わったことです。

朝ていとは天皇や貴族のこと、武家とは武士の集団です。

武家は本来は軍隊であり、政治組織ではありませんでした。

しかし、鎌倉時代が150年続いていることから政治をうまくすすめていたことがわかります。

平安時代の終わりに源氏と平氏が戦い、源氏が勝って鎌倉時代が始まりました。

源頼朝は今の神奈川県鎌倉市に幕府をつくりました。幕府とは、武士のトップである将軍が政治と行政を行う機関です。

当時は民主国家ではなかったので政治＝行政でした。

源頼朝は天皇からせいい大將軍(大將軍)の役職を与えられ政治・行政のトップになったので幕府を開くことができたのです。

つまり源頼朝は天皇を消めつさせるクーデターを起こして天下をとったのではなく、朝ていのルールにしたがって実権をにぎったのです。

鎌倉幕府には御恩と奉公という暗黙のルールがありました。

「暗黙のルール」とは、当事者同士は黙っているが理解し、了承していることを意味する言葉です。

将軍が部下である御家人の土地の保有を認め、御家人が将軍のために働きます。

また、従者がその土地をめぐる別の者との間に紛争が起きたときは従者の側に立って解決を図ります。

一方で奉公とは、主人が戦うことになったとき、主人のために命をかけて戦うことです。

頼朝は弟の義経を使って平氏をほろぼしましたが、義経が軍人として優秀であったため頼朝は警かいます。

悲さんな兄弟げんかが始まります。

頼朝は義経を敵とみなして殺そうとします。義経は逃げますが、頼朝は3万人の軍隊を派けんして追い詰めます。  
義経は最後は切腹しました。

切腹とは、自らの腹を切るという武士の自害方法のことです。腹切りともいいます。

その勇気をたたえて武士にとって切腹は「名誉ある死」と考えられてきました。



戦乱が収まると源頼朝は行政や社会制度を整備していきます。地方の治安を守る守護は、現代の地方警察です。

地頭は地方の大農園であるしょう園の土地を管理して税をちょう収する役割を担っていたので、市役所と税務署を合わせたような組織です。

頼朝の死後、息子の源頼家が鎌倉幕府第2代将軍になりましたが、若いことに加え独裁的だったので有力武家の御家人たちが不満を持ちました。

御家人たちは「13人の合議制」という組織をつくり政治の方向性を決めました。

頼家は合議制の決定を了承するだけの存在となったのです。

合議制を仕切ったのは頼朝の妻で頼家の母である北条政子ら北条氏でした。

政子の弟の義時と父の時政が合議制のメンバーでした。

政子自身は合議制に入っていませんでしたが、将軍頼家の母として強大な権力を持つようになりました。

頼家は将軍になってすぐに「13人の合議制」に権力を奪われて落ち込みます。しかも頼家が病気になると、祖父の時政が頼家を裏切ります。

政子と時政の北条氏チームは頼家から将軍の職をうばい、時政はさらに頼家を暗殺しました。

源氏の力を弱める目的がありました。

政子と時政は、源頼家のあとの第3代将軍に12歳の源実朝を就かせます。

12歳では将軍の仕事ができないので時政が実権をにぎりました。

実は実朝も政子の子供なので政子の権力は強まる一方です。

政子は、自分の父、時政の力が強まるとじゃまに思い今度は時政を追放します。

実朝も暗殺されてしまいます。また子供を失った政子は落ち込みますが、幕府を守るため源氏の親せきの藤原頼経を第4代将軍にします。

藤原頼経は乳児だったので政子が後見人になり、政子は自分の弟、義時と一緒に幕府を支えました。

鎌倉幕府は源氏のものから完全に北条氏のものになってしまいました。京都にいる天皇、後鳥羽上皇はこのゴタゴタをチャンスとみしました。

後鳥羽上皇が北条氏にしかけた戦争を「承久の乱」といいます。しかし結果は北条氏＝鎌倉幕府の圧勝でした。

鎌倉幕府は、地元の東日本だけでなく京都がある西日本にもえいきょう力を持つようになりました。

京都にかん視組織の六波ら探題を置きました。

六波ら探題の主な役割は、西国で起きた紛争の処理・裁判と、武士による事件の取り締まり、朝ていのかん視などでした。

承久の乱からしばらくして北条政子が亡くなると北条氏一族はさらに横暴になり、部下の御家人たちが暴動を起こすようになりました。

日本国中で幕府に反抗する動きが強まったことで後醍醐天皇が動きます。後醍醐天皇は何度か失敗したあと幕府と北条氏を倒しました。後醍醐天皇の反乱を「建武の新政」といいます。

しかし後醍醐天皇は、仲間だったはずの名門武家の足利尊氏に裏切られます。

鎌倉時代の法整備で知られているのが御成敗式目です。北条氏は源氏から強引に権力を奪ったので政権を運営するのに基準が必要でした。

御成敗式目は51条で構成され、武士による土地保有のルールや、土地に関する訴訟の基準を定めました。

#### ■南北朝時代(1336年～1392年)

鎌倉幕府は内部のゴタゴタにより自滅しました。南北朝時代ではその混乱がより深まります。

南北朝時代は足利尊氏が、鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇を京都から追放した1336年に始まります。

尊氏は京都に室町幕府をつくります。

南北朝時代は56年しかなく「時代」としては短いため、次の室町時代の一部とみなす研究者もいます。

南北朝時代の名前の由来は南と北の戦争です。後醍醐天皇が南朝で大覚寺統、足利尊氏が支えんした光明天皇が北朝で持明院統といえます。

したがって南北朝時代は天皇が2人いる異常事態でした。

当初は足利尊氏がいて軍事力に勝る北朝が有利でしたが、尊氏とその弟直義が兄弟げんかをして内乱にまで拡大しました。

負けた足利直義が南朝についたことで南朝の力が復活し、再び北朝と戦いますが負けてしまいます。足利家は家族間で抗争し続けます。

混乱を治めたのは足利尊氏の孫である足利義満で、室町幕府の第3代将軍に就任。南朝と北朝を統一させて南北朝時代を終わらせました。

この時代は稲の品種が改良され、土地や水資源の整備が進み、「惣」という農協のような農村自治組織が生まれる農業革命が起きました。

足利義満は武士の武家文化と天皇の公家文化をゆう合せた北山文化をつくりました。

代表作の金閣寺の総工費は現在の価値にすると600億円といわれています。

## ■室町時代(1392年～1573年)

平安が源氏・平氏の時代、鎌倉が源氏・北条氏の時代なら、室町は足利氏の時代です。

足利氏が室町時代を盛り上げ混乱させました。

室町幕府第3代将軍の足利義満が南朝と北朝を統一した1392年が、180年続く室町時代の始まりです。

室町時代はききんや農民反乱の土一揆が発生し、11年戦争の応仁の乱が起きます。次の時代のより大きな混乱の引き金になってしまいます。

土一揆というのは、この時代にさかんに起こった農民、地侍の武装ほう起、つまりはクーデターのようなものです。

年ぐの減免や政治に対する不満などが原因で、しょう園領主・守護大名や酒屋・土倉などの高利貸などと武力で争いました。

火種になったのは足利氏による乱暴な政治でした。

足利氏は幕府を支えていた7つの有力武家(大名)の力を弱めようとしてしました。

7つの大名は斯波氏、畠山氏、細川氏、山名氏、赤松氏、一色氏、京極氏で、足利氏は強力な武力で仲間を少しずつたおしていったのです。

政治が混乱すれば行政が混乱し、この時代のとても大事な産業である農業も混乱します。

農民たちは過こくなかん境に置られました。

土一揆はきょう作や病気、借金にたえかねた農民が起こした暴動です。

幕府は多発する土一揆を制圧できず、借金の帳消しを迫られました。

足利氏の内紛に比叡山延りやく寺が加わって内乱が起きます。

寺＝仏教＝お坊さんなのですが、比叡山延りやく寺は財力と武力を持つとても大きな勢力でした。

第4代将軍足利義持は比叡山延りやく寺を攻め、お坊さんのトップを殺害。

義持は部下である有力大名も反抗すると容赦なくしゆく清しました。

義持の横暴に、足利氏内にも大名たちにも「殺される前に殺す」という気運が高まりました。

全員が武力を持つので大変な事態になります。

今の日本の政治の争いであれば負けても大臣になれないとか議員を引退するくらいで済みますが、

室町時代の政治の争いはすぐに戦争になります。

いつぱく発してもおかしくない状況で起きたのが応仁の乱です。きっかけは8代将軍足利義政の後継い問題でした。

義政と妻、日野富子の間には子供がなく、夫婦は義政の弟、義視を養子にむかえました。

ところが夫婦に義尚が生まれます。

富子は養子の義視ではなく、自分の子である義尚を次の将軍にしたいとだったので、

次の将軍になるつもりでいた義視が不満を持ちます。

さらに有力大名の斯波氏、畠山氏、細川氏、山名氏でも後継い争いが起きて、幕府は義視派の東軍と義尚派の西軍に分裂しました。

足利氏と有力大名が11年間も応仁の乱を続けたので幕府は弱体化します。

幕府を倒そうとする勢力が現れ戦国の世になっていきます。

下克上は、下の者が上の者を裏切って力をうばうことです。

農民は土一揆で街をしゅうげきして、武士は武力で幕府を攻げきします。

このころの社会は上の者が下の者を従わせることでちつ序が保たれていたため、

「下克上していいんだ」という気運はちつ序のない状態を生み出しました。

室町時代は金融サービスが発展しました。土倉は物を担保にして金銭を貸しました。

土倉とは当時の高利貸しです。酒屋は酒造りで得た利益で金貸し業を始めました。

土倉と酒屋は農民の土一揆の対象となりました。土倉も酒屋も幕府に多額の税を納めていたため、土一揆は幕府の財力を低下させました。

農業では稲の品種改良が進んで害虫や水不足に強くなって収かく量が増えました。

和紙や木綿、織物といった生産物も増えていきました。

道具が開発され、板をつくれるようになりしよ民の住居が整備されていきました。

物が増えると流通と交通が発達して経済が活性化されました。

室町時代は政治と社会が混乱したものの、しよ民はしたたかに経済力を強めていきました。

しかし富はいつの時代も争いの原因になるのです。

鉄砲とキリスト教が日本に伝来したのは室町時代です。

ヨーロッパは大航海時代に突入し、スペイン人やポルトガル人が日本に来ました。

織田信長は足利義昭をよう立てして彼を第15第将軍にしますが、2人はそのあと戦うことになりません。

信長が勝った1573年に室町幕府は消滅します。

#### ■安土桃山時代(1568年～1600年)

安土桃山時代は戦国時代と呼ばれるほど戦争が至るところで起きました。

当時は民主的につくられた法律で定められた警察がなく、武力を持てば誰でも下克上で上を目指せたのでクーデターやテロがよく起きました。

室町時代は室町幕府がなくなった1573年に終わりましたが、安土桃山時代は1568年に始まっていて5年のダブりがあります。

これは地方(愛知県)の大名にすぎなかった織田信長が足利義昭を連れて京都に出向いたのが1568年だったからです。  
信長時代の始まりです。

信長は日本史ファンに好かれているだけでなく、企業経営者も信長の政策を経営論に使っているほどです。

しかし信長はとても残にんな人間です。

信長は守護代という重要な職務にある大名の出身ですが、子供のころから暴れん坊で大うつけ(中身がない者)と呼ばれていました。

しかし信長は17歳で織田家の当主になり、27歳で4千人の兵で約3万人の今川義元軍に勝ちました。

これを「おけはざまの戦い」といいます。

今川義元は当時41歳で政治と戦争の経験が豊富で仲間の大名もたくさんいました。

当初は今川軍が圧勝するとみられていました。

信長はスパイをせん入させたり、ゲリラ戦を仕かけたりして今川軍を分散させます。

信長はそのすきに義元だけを狙い首をとったのです。

「首をとる」は例えの表現ではなく、当時は本当に敵の大將の首を切って頭部を戦利品として持ち帰る習慣がありました。残こくな世界です。

信長は敵である朝倉軍と浅井軍をかくまった比叡山延りやく寺を燃やしてしまいます。延りやく寺は朝てい(天皇)公認の重要な寺でした。

信長は延りやく寺に3万人の兵を送り、あらゆる建物を焼き比叡山は火の海になりました。

信長は逃げまどう3千人のお坊さんや子供を持つ母を殺しました。

当時の延りやく寺は、軍事訓練を積んだお坊さんがたくさんいました。このように、戦う訓練をしたお坊さんを「そう兵」といいます。

そう兵の数はたくさんいたため、これは無視できない軍事力です。  
そのため、信長は自分の政権基盤を固めるために延りやく寺を焼いたのです。

信長の力は圧倒的でしたが、歯向かう大名もいました。その代表格が山梨県を拠点にしていた武田信玄です。

武田信玄は成果を出した部下にお金を与えたり、敵を完全に消めつさせずに少しか勝つことで敵のぞう悪を大きくしないようにしたりしました。

恐怖で人を従わせる信長に対し、信玄は人の心をつかんで軍を強くしました。

信玄はのちに天下人になる徳川家康に勝ったこともあります。

力をつけた武田信玄ですが信長と戦う直前に病気で死んでしまいます。



武田信玄というリーダーを失った武田軍は信長との戦い負けてしまいます。これが「長しなの戦い」です。

宿敵である武田軍を倒した信長は最強状態になります。

1576年にはびわ湖の近くに安土城(滋賀県)を建てます。今は城せきしか残っていません。

信長は1575年に朝ていから右近衛大将の称号が与えられ天下人になりました。

信長は天下人になりましたが、まだ抵抗する大名がいたので天下統一はできていません。

それで信長は軍を各地に派けんしていました。

味方の大名を地方に派けんしたため、京都にいた信長の守りは手うすでした。信長は本能寺(京都市)にいたときに暗殺されました。

信長を殺したのは信長の第一の部下である明智光秀でした(本能寺の変)。

光秀は成果をあげていましたが信長からいじめられていました。

比叡山延りやく寺の焼き討ちではリーダーでした。  
焼き討ちとは城や家などを火で燃やし、敵を攻めきずることです。

その悪名の一方で、光秀は人格者で部下想いの上司でもありました。

光秀は、信長を殺せば、信長の横暴に苦しんでいた大名が味方してくれると思っていたがそうはなりませんでした。

光秀はすぐに、信長の有力な部下であった豊臣秀吉に殺されてしまいます。これを「山崎の合戦」といいます。

光秀をたおした秀吉は、次の天下人になるわけですが、その地位のかく得は簡単ではありませんでした。

信長の部下はほかにもいたからです。

秀吉は農民出身で、最も身分が低い兵士から出世していきます。戦争での成果が評価され、信長の重要な部下の一人になりました。

光秀を殺したあと、秀吉や柴田勝家といった信長の重要部下たちは、信長の後継者を決める会議を開きます。

この会議は「清洲会議」と呼ばれ、歴史上有名な会議になりました。

秀吉は信長の孫である織田秀信を支持し、柴田勝家は信長の三男である織田信孝を支持しました。  
支持というのは、簡単にいうとその人を応援することです。

結局、秀吉の意見がとおりましたが2人は対立します。

秀吉は勝家と信孝の2人をたおし、天下統一に近づきます。しかし徳川家康が織田信雄と組み、秀吉に戦いをいどみました。

この戦いを「小牧・長久手の戦い」といいます。

家康は戦いを有利に進めましたが、秀吉は信雄を降伏させ小牧・長久手の戦いは終了。家康は負けなかったのですが勝てませんでした。

秀吉は朝ていから、天皇を助ける重要な役職、関白を任命され、さらに太政大臣という最高職にも就きます。秀吉は天下人になりました。

天下人とは、天下の政権をその手におさめた人のことをいいます。

秀吉は戦国の世を平和にする取り組みを進めました。惣無事令は大名どうしの戦いを禁止して、違反すれば厳しい罰を与えます。

簡単にいうと、これは勝手に戦争することは許さず、戦争になる前に天下人である秀吉に報告をして、

その解決を秀吉にすべてまかせよ、という意味です。

ただこれは秀吉の戦略でもあり、惣無事令に違反した大名を罰するために大軍を送り、豊臣家の力をみせつけることができました。

秀吉は小牧・長久手の戦いで戦った家康を仲間に引き込みます。秀吉が勝ち取った領土を家康にゆずることもありました。

秀吉は家康を信頼していたという説もありますが、戦国時代のことなので単純に信頼していたわけではないでしょう。

秀吉は家康の実力を知っていたので敵にしにくくなったのでしょうか。秀吉は死ぬ間際、家康に「息子秀頼を頼む」といっています。

しかし秀吉の死後に天下をとった家康は、豊臣家を攻撃し秀頼を自殺に追い込んでいます。家康も裏切りで上に昇っていったのです。

話を秀吉の平和策に戻します。秀吉は刀狩令という法律をつくります。農民や商人に、刀などの武器を持つことを禁じ、取り上げたのです。

これは言うまでもなく、クーデターなどを起こさせないためです。

秀吉の死後、秀頼があとをつぐことになったのですが当時まだ5歳。秀吉に近かった有力大名が秀頼の後見人になるために争います。

秀吉の部下たちは、石田三成派と徳川家康派にわかれ大戦争を引き起こします。関ヶ原の戦い(1600年)です。

2大勢力の戦争は長期戦になると思いきや、6時間で家康が勝ってしまいます。三成は人気がなく自軍から裏切り者が続出したためです。

これで安土桃山時代も戦国の世も終わったわけですが、ここで武士以外の歴史上のスーパースターを紹介します。千利休です。

千利休は大阪商人の家に生まれ、17歳で茶の湯(今の茶道)を習います。茶の湯は、客を抹茶と食事でもてなす式です。

現代では茶道は女性の習い事というイメージが強いのですが、織田信長は政治の道具に使いました。

茶の湯の席で仲間と戦争の打ち合わせをしたり、茶の湯の道具である茶器に価値をつけて資産にしたりしました。

土でつくった茶わんを高額で売却できれば、少ない投資で巨万の富を築けます。それには茶の湯のブランディングが必要でした。

信長は千利休の芸術力とプロデュース力を使って茶の湯のブランド化に成功しました。高額な茶器を持つ大名ほどステータスが上がります。

信長は茶頭という役職をつくり、茶の湯を行政に使いました。千利休は今井宗久、津田宗及とともに茶頭に就任します。

信長の死後、豊臣秀吉は茶頭制度を引きつぎます。茶の湯は権力の象ちょうになり、有力大名がこぞって千利休の茶の弟子になりました。

秀吉は千利休の上司でしたが、茶の湯では千利休の弟子でした。秀吉はそれくらい千利休の美的センスに惹かれていたのです。

しかし秀吉は、千利休が大名たちと仲良くなるにつれて「反乱を起こすのではないか」と心配になり、千利休に切腹を命じます。

千利休は芸術家でありながら政治的な野心があり、秀吉を使って達成しようとしたことがあだとなって自死を招きました。

千利休の芸術観は現代にも受け継がれていて、京都の寺院、みょうきあんにある茶室「待あん」は、

千利休がつくったもので国宝になっています。

## ■江戸時代(1603年～1867年)

秀吉は農家出身のため、せいじ大將軍になれませんでした、家康は武家出身なので1603年にその職に就くことができました。江戸幕府の誕生です。

江戸時代は1603年から、江戸幕府が天皇に政權をゆずって日本政府が発足する1867年まで265年続きました。おどろくほどの長期政權です。

江戸時代・江戸幕府といえば家康、と思われていますが、実は政治と行政で世の中を治めたのは第3代將軍家光です。

ついこの間まで戦国時代だったのに江戸時代になってすぐに平和になったのは、公正なルールがつくられ経済成長したからです。

家光は大規模な公共事業やインフラ整備を行い、日本経済はどんどん大きくなりました。生活が豊かになると人は争わないものです。

家光は、昔から徳川家に仕えていた「ふ代大名」と関ヶ原の戦いのあとに仲間になった「外様大名」を公平に扱いました。

老中、若年寄、大老という職をつくり有力大名を就かせました。この職は現代の内閣の大臣のようなもので組織で政治をしていきました。

さらに裁判所にあたる町奉行、宗教を管理する寺社奉行、財務省にあたるかんじょうぶぎょうをつくり官りょう機構を構築しました。

家光は参勤交代を導入します。大名に、妻と子供を首都の江戸に住ませるよう命じ、大名は地元と江戸に1年ごとに住ませました。

江戸幕府が大名の妻子を人質に取った形になります。これで大名たちは幕府に逆らえなくなりました。

家光は外国との貿易を禁じるさ国を実施しました。幕府は仏教を重視していたのでキリスト教信者の入国を阻止するねらいがありました。

ただし幕府は、長崎県の一部でのみ海外貿易を許し特定の商人に商売させました。これにより輸出入の利益を幕府が独占できました。

家光は祖父家康の墓を置く神社である東照宮を日光(栃木県)につくりました。ごうかな建物が並び徳川家を称えています。

徳川時代の終わりの始まりは1853年の、アメリカかん隊の来航でした。司令長官ペリーは、さ国をしていた幕府に開国を迫りました。

幕府はペリーに1年後に回答するといって帰らせましたが、その1年間で海外を調べたところ勝てないとわかりました。

1年後に再びペリーが日本に来たとき、幕府は、アメリカに有利な日米和親条約を結ばざるをえませんでした。

幕府が弱体化したことで地方が反乱を起こし、幕府は政権を天皇に返し、江戸幕府と江戸時代が終わりました。

このあと、日本は明治(1868年 - 1912年)→大正(1912年 - 1926年)→昭和(1926年 - 1989年)→平成(1989年 - 2019年)→令和(2019年～現在)と続いていくのでした。

「日本の歴史」は、いかがでしたか？

今後の動画制作に活かしますので、感想を是非コメント欄から教えてください。

それでは、また別の動画でお会いしましょう。



**Japanese-listening-SUSHI**

